

的な活動を目指して」というテーマで開催しました。

近畿一円から定員で設定していた90名を超える会員の皆さまのご出席があり、今回の研修会を主管した大阪市育成会として、安心するとともに大変うれしく思いました。

午前中は、基調講演として「魅力ある育成会活動について」をテーマに、全国手をつなぐ育成会連合会の小出隆司副会長からご講演がありました。小出副会長は静岡県手をつなぐ育成会の会長、浜松市浜松手をつなぐ育成会(以下、浜松育成会)の会長も現在されており、今回は浜松での地元育成会の現状や取り組みについてのお話をお伺いしました。



浜松市は市町村合併で12市町村を吸収したこともあり、面積としては全国で2番目の大きい市になり、分かりやすい例としては、大阪府から大阪市と堺市を除いたくらいの規模と同等になります。浜松育成会では学齢期以前のお子さんを持つ会員が4割を占めているそうです。また、育成会自体も数年前に直営で行っていた事業所の経営を終了し、会の力を運動体(親の会)に集中する選択をしたそうです。その結果、福祉サービスの利用者(受益者)として、また、それらの事業の評価者として全ての事業者・施設と積極的かつ平等に関係をもつ活動に転換できたとのこと。一方、行政や関係機関に対しても、事業実施主体者の立場でなく、福祉サービスの利用者の集合体の立場として関わりを持っているそうです。

浜松育成会では会員さんのお子さんの年齢階層ごとに6つの部会、部会と会の中の専門分野を動かしていく9の委員会で活動をしておられます。役員も重複されている方を含めて、約100名になるそうです。役員にかかる負担の軽減の意味もあるようですが、会員の意識の中に、それだけ自分たちの会だという気持ちが共有できているのではないかと感じました。

小出副会長は育成会の本質について次のように話されていました。「私たちが一番つらく苦しかった時期は、子どもが生まれ、障がいがあった時なので、

その時期の人たちに手を差し伸べてあげるべきで、育成会だからそれが出来るのではないか。」とお話されていました。大阪市育成会では、養護学校(当時)の卒後の進路の確保が重要として活動してきたこともあり、主に成人向けのサポートも行ってきています。しかし、福祉サービスが充実してきた昨今では、高齢化に向けた成人向けのサポートも重要ですが、子どもの受容の含めた幼児期・学齢期の親向けのサポートは、育成会の原点であり欠かすことができない事と改めて気付きました。誰でもパソコンを叩けば情報は幾らでも入る情報化社会ではありますが、大阪市育成会としても、今一度、心に寄り添うといったアナログ的なサポートに回帰することも含め、会員全体で会員を支え合うような仕組みづくりも考えていきたいと思いました。

午後は、「育成会を拡大していくためには」というテーマ設定でワークショップがもたれました。参加者を8つのグループに分け、リーダーを中心に、各地区の取り組みや実情などを話し合いながら、新たな会員の獲得と育成会活動の活性化について議論しました。

各グループからの発表をまとめると、次のような課題が出てきました。

- ・会員の入会を促そうとしたところ、個人情報取り扱いをめぐりトラブルとなった。
- ・市町村育成会の活動はそれなりに活発な活動をしているが、県レベルでは低調になっている。
- ・父親の会を始めているが、拡大していかない。
- ・学齢期の会員の告知依頼を学校に打診しても取り合ってもらえない。
- ・若い会員に次期役員の就任を打診したところ退会された。

グループワークでの各地区育成会の状況や取り組みをお聞きして、共感できる場所や今からでも始められると思うようなことなどもあり、今後の活動の参考にしたいと思いました。

今回は時間の都合上、各地区育成会での課題を炙り出した所で終わってしまいましたが、情報交換をしたり知恵を出し合う場も大切だと感じました。

最後に全国手をつなぐ育成会連合会の久保厚子会長から、育成会は共同体として、会員の満足感を充足するように活動しながら、組織として、固さ(組織の団結力)・強さ(目的達成能力の高さ)・大きさ(会員の数)を目指していくことが大切というお話があり、大阪市育成会の法人理念にもある、障がいのある人が安心して心豊かにすごせるような地域作りを目指し、